芥川龍之介全集

第四巻

昭和二年十一月二十五日印刷
昭和二年十一月三十日發行

芥川龍之介全集第四卷

著作者　芥川龍之介
發行者　東京市神田區南神保町十六番地　岩波茂雄
印刷者　東京市本所區番場町四番地　守岡功
印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社本所分工場
發行所　東京市神田區南神保町十六番地　岩波書店
電話（33）九段　一〇二二番　一〇二八一番　一〇二二番
振替口座東京七四四一六番

（寺島製本）

第四卷目錄

寒さ　起　一頁
或戀愛小說　起　一三頁
文章　起　二五頁
第四の夫から　起　四一頁
少年　起　四九頁
文放古　起　八三頁
十圓札　起　九三頁
大導寺信輔の半生　起　一一三頁
馬の脚　起　一三九頁
早春　起　一六三頁
春　起　一七三頁

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

溫泉だより　起一九五頁
桃太郎　起二〇九頁
尼提　起二二一頁
海のほとり　起二二九頁
湖南の扇　起二四七頁
年末の一日　起二七一頁
カルメン　起二八一頁
三つのなぜ　起二八九頁
春の夜　起二九九頁
點鬼簿　起三〇七頁
悠々莊　起三一九頁

彼	起三二七頁
彼第二	起三四三頁
玄鶴山房	起三五九頁
蜃氣樓	起三八七頁
河童	起四〇一頁
誘惑	起四八三頁
淺草公園	起五〇七頁
たね子の憂鬱	起五二九頁
古千屋	起五四一頁
冬	起五五一頁
手紙	起五六五頁

三つの窓　起五七九頁
闇中問答　起五九七頁
齒車　起六一七頁
或阿呆の一生　起六七一頁

寒さ

或る雪上りの午前だつた。保吉は物理の教官室の椅子にストオヴの火を眺めてゐた。ストオヴの火は息をするやうに、とろとろと黄色に燃え上つたり、どす黒い灰燼に沈んだりした。それは室内に漂ふ寒さと戰ひつづけてゐる證據だつた。保吉はふと地球の外の宇宙的寒冷を想像しながら、赤あかと熱した石炭に何か同情に近いものを感じた。

「堀川君。」

保吉はストオヴの前に立つた宮本と云ふ理學士の顔を見上げた。近眼鏡をかけた宮本はズボンのポケットへ手を入れたまま、口髭の薄い脣に人の好い微笑を浮べてゐた。

「堀川君。君は女も物體だと云ふことを知つてゐるかい？」

「動物だと云ふことは知つてゐるが。」

「動物ぢやない。物體だよ。——こいつは僕も苦心の結果、最近發見した眞理なんだがね。」

「堀川さん、宮本さんの云ふことなどを眞面目に聞いてはいけませんよ。」

これはもう一人の物理の教官、——長谷川と云ふ理學士の言葉だつた。保吉は彼をふり返つた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

長谷川は保吉の後ろの机に試驗の答案を調べかけたなり、額の禿げ上つた顏中に當惑さうな薄笑ひを漲らせてゐた。

「こりや怪しからん。僕の發見は長谷川君を大いに幸福にしてゐる筈ぢやないか？——堀川君、君は傳熱作用の法則を知つてゐるかい？」

「デンネツ？　電氣の熱か何かかい？」

「困るなあ、文學者は。」

宮本はさう云ふ間にも、火の氣の映つたストオヴの口へ一杯の石炭を浚ひこんだ。

「溫度の異なる二つの物體を互に接觸せしめるとだね、熱は高溫度の物體から低溫度の物體へ、兩者の溫度の等しくなる迄、ずつと移動をつづけるんだ。」

「當り前ぢやないか、そんなことは？」

「それを傳熱作用の法則と云ふんだよ。扨女を物體とするね。好いかい？　もし女を物體とすれば、男も勿論物體だらう。すると戀愛は熱に當る譯だね。今この男女を接觸せしめると、戀愛の傳はるのも傳熱のやうに、より逆上した男からより逆上してゐない女へ、兩者の戀愛の等しくなる迄、ずつと移動をつづける筈だらう。長谷川君の場合などは正にさうだね。……」

「そおら、はじまつた。」

長谷川は寧ろ嬉しさうに、擽られる時に似た笑ひ聲を出した。

「今Sなる面積を通し、T時間内に移る熱量をEとするね。すると——好いかい？　Hは溫度、Xは熱傳導の方面に計つた距離、Kは物質により一定されたる熱傳導率だよ。すると長谷川君の場合はだね。……」

宮本は小さい黑板へ公式らしいものを書きはじめた。が、突然ふり返ると、さもがつかりしたやうに白墨の缺を抛り出した。

「どうも素人の堀川君を相手ぢや、折角の發見の自慢も出來ない。——兎に角長谷川君の許嫁なる人は公式通りにのぼせ出したやうだ。」

「實際さう云ふ公式がありや、世の中は餘つ程樂になるんだが。」

保吉は長ながと足をのばし、ぼんやり窓の外の雪景色を眺めた。この物理の教官室は二階の隅に當つてゐる爲、體操器械のあるグラウンドや、グラウンドの向うの並松や、その又向うの赤煉瓦の建物を一目に見渡すのも容易だつた。海も——海は建物と建物との間に薄暗い波を煙らせてゐた。

「その代りに文學者は上つたりだぜ。——どうだい、この間出した本の賣れ口は？」

「不相變ちつとも賣れないね。作者と讀者との間には傳熱作用も起らないやうだ。——時に長谷川君の結婚はまだなんですか？」

「ええ、もう一月ばかりになつてゐるんですが、——その用もいろいろあるものですから、勉强の出來ないのに弱つてゐます。」

「勉强も出來ないほど待ち遠しいかね。」

「宮本さんぢやあるまいし、第一家を持つとしても、借家のないのに弱つてゐるんです。現にこの前の日曜などにはあらかた市中を歩いて見ました。けれどもたまに明いてゐたと思ふと、ちやんともう約定濟みになつてゐるんですからね。」

「僕の方ぢやいけないですか？　毎日學校へ通ふのに汽車へ乘るのさへかまはなければ。」

「あなたの方ぢや少し遠すぎるんです。あの邊は借家もあるさうですね、家内はあの邊を希望してゐるんですが——おや、堀川さん。靴が焦げやしませんか？」

保吉の靴はいつの間にかストオヴの胴に觸れてゐたと見え、革の焦げる臭氣と共にもやもや水蒸氣を昇らせてゐた。

「それも君、やつぱり傳熱作用だよ。」

宮本は眼鏡を拭ひながら、覺束ない近眼の額ごしにニヤリと保吉へ笑ひかけた。

× × × × × ×

それから四五日たつた後、――或る霜曇りの朝だつた。保吉は汽車を捉へる爲、或る避暑地の町はづれを一生懸命に急いでゐた。路の右は麥畑、左は汽車の線路のある二間ばかりの堤だつた。人つ子一人ゐない麥畑はかすかな物音に充ち滿ちてゐた。それは誰か麥の間を歩いてゐる音としか思はれなかつた、しかし事實は打ち返された土の下にある霜柱のおのづから崩れる音らしかつた。

その内に八時の上り列車は長い汽笛を鳴らしながら、餘り速力を早めずに堤の上を通り越した。保吉の捉へる下り列車はこれよりも半時間遲い筈だつた。彼は時計を出して見た。しかし時計はどうしたのか、八時十五分になりかかつてゐた。彼はこの時刻の相違を時計の罪だと解釋した。「けふは乘り遲れる心配はない。」――そんなことも勿論思つたりした。路に隣つた麥畑はだんだん生垣に變り出した。保吉は「朝日」を一本つけ、前よりも氣樂に歩いて行つた。

石炭殻などを敷いた路は爪先上りに踏切りへ出る、――其處へ何氣なしに來た時だつた。保吉は踏切りの兩側に人だかりのしてゐるのを發見した。轢死だなと忽ち考へもした。幸ひ踏切りの柵の側に、荷をつけた自轉車を止めてゐるのは知り合ひの肉屋の小僧だつた。保吉は卷煙草を持つた手に、後ろから小僧の肩を叩いた。

「おい、どうしたんだい？」

「轢かれたんです。今の上りに轢かれたんです。」

小僧は早口にかう云つた。兎の皮の耳袋をした顏も妙に生き生きと赫いてゐた。

「誰が轢かれたんだい？」

「踏切り番です。學校の生徒の轢かれさうになつたのを助けようと思つて轢かれたんです。ほら、八幡前に永井つて本屋があるでせう？　あすこの女の子が轢かれる所だつたんです。」

「その子供は助かつたんだね？」

「ええ、あすこに泣いてゐるのがさうです。」

「あすこ」といふのは踏切りの向う側にゐる人だかりだつた。成程、其處には女の子が一人、巡査に何か尋ねられてゐた。その側には助役らしい男も時時巡査と話したりしてゐた。踏切り番は

――保吉は踏切り番の小屋の前に菰をかけた死骸を發見した。それは嫌惡を感じさせると同時に好奇心を感じさせるのも事實だつた。菰の下からは遠目にも兩足の靴だけ見えるらしかつた。

「死骸はあの人たちが持つて行つたんです。」

こちら側のシグナルの柱の下には鐵道工夫が二三人、小さい焚火を圍んでゐた。黄いろい炎をあげた焚火は光も煙も放たなかつた。それだけに如何にも寒さうだつた。工夫の一人はその焚火に半ズボンの尻を炙つてゐた。

保吉は踏切りを通り越しにかかつた。線路は停車場に近い爲、何本も踏切りを横ぎつてゐた。彼はその線路を越える度に、踏切り番の轢かれたのはどの線路だつたらうと思ひ思ひした。が、どの線路だつたかは直に彼の目にも明らかになつた。血はまだ一條の線路の上に二三分前の悲劇を語つてゐた。彼は殆ど、反射的に踏切の向う側へ目を移した。しかしそれは無効だつた。冷やかに光つた鐵の面にどろりと赤いもののたまつてゐる光景ははつと思ふ瞬間に、鮮かに心へ燒きついてしまつた。のみならずその血は線路の上から薄うすと水蒸氣さへ昇らせてゐた。……

十分の後、保吉は停車場のプラットフォオムに落着かない歩みをつづけてゐた。彼の頭は今しがた見た、氣味の惡い光景に一ぱいだつた。殊に血から立ち昇つてゐる水蒸氣ははつきり目につ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com